

## ウル第三王朝のエラム統治とシマシュキ朝の成立

前田 徹

### はじめに

本稿ではウル第三王朝時代のエラムを対象にし、ウル第三王朝によるエラム支配を、ウルの王によって派遣されたスサのエンシ（支配者）とスッカлмаフ、それと在地有力者層との関係から検討する。ついで、ウル第三王朝を滅ぼしたのがシマシュキ朝のエラムであるので、シマシュキ勢力の勃興も焦点になり、それを論じることにする。

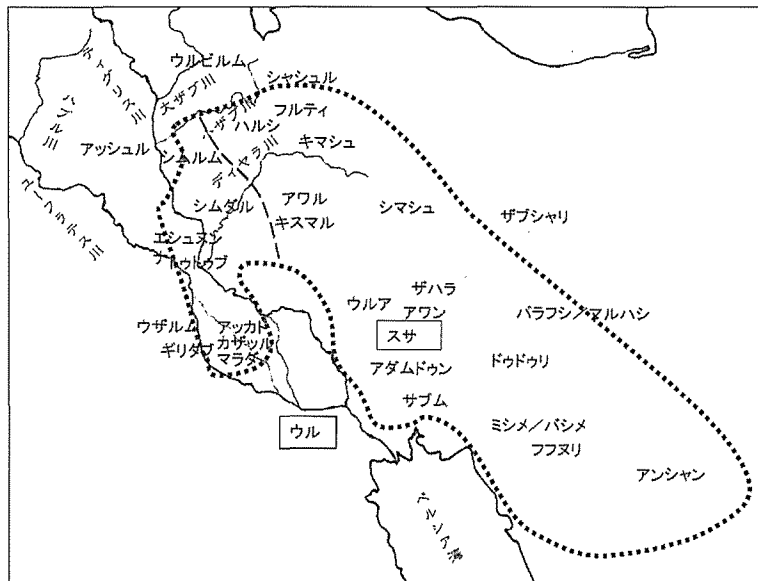


図1

ウル第三王朝とエラムとの関係は、エラムの統一を果たして支配地域を拡大したエラム王プズルインシュシナクの勢力を、初代ウルナムがディヤラ川流域やアッカド地方から排除することに始まる [前田 1993]。それ以降、次の王シュルギ治世の前半まで、史料がなく不明とせざるを得ない。シュルギは、48年の治世のなかで、21年にエラムとの軍事的要衝であるデールを征服した。デールには王族将軍が派遣されることになるが [前田 2008]、エラ

ムへの本格的な介入はデールを確保することで可能になったのであり、この年以降の年名は周辺地域への征服記事で埋まるようになる。

## I エラムの諸勢力

シュルギ治世でエラムとの関係を知りうる最初は、シュルギ 18 年の年名にある「王女をマルハシの王妃 (nam-nin) とした」ことである<sup>1)</sup>。これはデール征服以前であり、降嫁政策によってエラム諸勢力との関係を模索したのである。シュルギ 30 年の年名に、同様な「王女をアンシャンの支配者 (ensi<sub>2</sub>) に嫁がせた」がある。アンシャンの在地勢力を承認することで、はじめて王女の降嫁は可能となる。アンシャンは、4 年後のシュルギ 34 年に反乱を企て鎮圧された。このとき、アンシャンの戦利品を、エラム地方にあったアダムドゥンの支配者が王の家畜管理人に運んだ<sup>2)</sup>。アンシャンへの遠征軍にエラムの在地勢力が加わっていたことが確実視され、エラム地方へのウルの勢力浸透は着実に進行していた。

広大なエラムには、在地の支配者を戴いた都市 / 国が多くあった。ウルの王が重要視した都市については、ラガシュ出土のメッセンジャーテキストから判断される。この種の文書には、「伝令のシュイリ、スサからウルに行った」[MTBM 48] のように目的地が記されており、文書に記録される頻度から関係性の密度が測れるはずである。文書に記された回数を示す (典拠となった文書の表示は省略)。

- 1) Susa 437, 2) Adamdun 155, 3) Sabum 150, 4) Anshan 148, 5) Urua 91, 6) Huhunuri 30, 7) Kimash 30, 8) Shimashki 19, 9) Zaul 7, 10) Duduli 4, 11) Gisha 4, 12) Bashime 3, 13) Manhili 1

ラガシュのメッセンジャーテキストで最も古い日付はシュルギ 32 年 12 月 [MVN 7 211] であり、最後がイッピシン 2 年 11 月 [TCTI 2 3187] である。ただし、多くは月を記すにしても、年の表示がなく、時期によって変化するであろうウルとエラム諸都市の関係は、この表から追うことはできない。

伝令などの行き先は、圧倒的な差でスサが筆頭にあり、ついで、アダムドゥン、サブム、アンシャン、ウルアが来る。エラム南部の中心都市であるアンシャン以外のウルア、アダムドゥン、サブムはスサに近く、スサ周辺地域への往還が頻繁であったことが理解できる。ス

1) 年名リストにあっても、この年名を記した同時代文書は見つかっていない [Sigrist & Gomi 1991]。

2) Farber, AOAT 240, 6 (S 33 xi): 44 udu-hi-a ba-ug<sub>7</sub>, nam-ra-ak an-ša-an<sup>ki</sup>, ki ur-<sup>gis</sup>gigir ensi<sub>2</sub> a-dam-dun<sup>ki</sup>-ta 「44 頭の各種の羊, 死体, アンシャンの戦利品, アダムドゥンの支配者ウルギルから。」文書の日付はシュルギ 33 年 11 月である。遠征はシュルギ 33 年に始まっており、年末までに成果を上げていた Cf. [Steinkeller 2007, 226, & no. 45]。

サはエラムの最高神インシュシナクを祭っており、この神からプズルインシュシナクは四方世界を授けられた〔前田 1993〕。歴史的に特殊な位置を占めるスサを、ウル第三王朝はエラム支配の要として重視し、支配者（エンシ）を派遣した。

## II スサのエンシ

ウルの王によって任命されたスサの支配者（エンシ）として確認できるのは、ウルキウム、ザリクム、ベリアリクの3人である。最初のウルキウム *ur-ki-um* は、シュルギ 33 年と 34 年に在位したことが史料から裏付けられる<sup>3)</sup>。シュルギ 32 年の文書にウルキウムは将軍として現れており<sup>4)</sup>、ウルの王は将軍職にある者をスサの支配者に補任した。スサのエンシとしての活動を記す文書は残されていないが、ウルキウムがスサの支配者であったシュルギ 34 年にアンシャンの反乱があった。彼はアダムドゥンの支配者などを動員して反乱の鎮圧にあたったと考えられる。

ウルキウムに次いで、スサの支配者として知られるのは、ザリクム *za-ri<sub>2</sub>-qum* である。ウルキウムとザリクムの間に別の支配者が存在したかは不明であるが、ザリクムの在位は、少なくともシュルギ 40 年からアマルシン 5 年までの 14 年間で知られる。ウルの王は、ザリクムにアッシュルの将軍を兼務させた<sup>5)</sup>。スサの支配者が遠く離れたアッシュルの要職を兼

3) Shulgi 33 RTC 329 (S 33 vi): *ur-ki-um ensi<sub>2</sub> šušin<sup>ki</sup>*, Shulgi 34 RTC 324 (S 34 ix): *da-gu šeš ur-ki-um <ensi<sub>2</sub>>*,

n. d. MVN 6 561 (iii): *ur-ki <-um> ensi<sub>2</sub> šušin<sup>ki</sup>, šušin<sup>ki</sup>-še<sub>3</sub> gin-ne<sub>2</sub>*, RTC 322 (vi): *ur-ki-um ensi<sub>2</sub> šušin<sup>ki</sup>, šušin<sup>ki</sup>-še<sub>3</sub> gin-ne<sub>2</sub>*, RTC 323 (vii) *ur-ki-um ensi<sub>2</sub> šušin<sup>ki</sup>, šušin<sup>ki</sup>-še<sub>3</sub> gin-ne<sub>2</sub>*.

4) NSTROM 2 326 (S 32 ix) *lu<sub>2</sub>-kin-gi<sub>4</sub>-a ur-ki-um šagina*. この文書の最初にある *pad gal-gal* <sup>sis</sup>*banšur šagina* 「将軍の宴」は、シムルム征服を祝うためか、もしくは翌年の年名にあるカルハル遠征のための宴と考えられる。

5) このことを最初に指摘したのはハッローである [Hallo 1956, 224]。ただしハッローの提示には問題点がある。第一に、大隊長格のヌバンダ職にあるザリクムを同一人物とするが、このザリクムは別人であり、エシュヌナに近いイシム・シュルギを本拠にした者と考えられる (*za-ri<sub>2</sub>-iq nu-banda<sub>3</sub>*: Langdon, Baby. 7, 3 [AS 1 iii 13], SET 10 [AS 5 ix 11], CT 32 19-22 [IS 2 iii 29] (*i-šim-<sup>d</sup>šul-gi<sup>ki</sup>*), TJA: JES 337 [ ])。第二に、ザリクムはスサと同じくアッシュルにおいても支配者（エンシ）であったとするが、それを示す文書は未刊の YBC 7278 だけであり、検証できない。碑文 (RIME 3/2, 278) から確かめられるのは、アッシュルにおいてザリクムが名乗ったのは将軍であったことである。第三に、ハッローは、ザリクムが、スサからアッシュルへ、再びアッシュルからスサに職務地を変えたと考えており、この説も受容されている [Potts 1999: 132, 135]。しかし、重要な職責を頻繁に変えることは不自然である。確かに、シュルギ 42 年からアマルシン 2 年までの期間、スサのエンシであるザリクムの史料はない。しかし、ザリクムだけでなく、ザリクムからスサのエンシを引き継いだはずの者についても史料は沈黙する。史料の偶然性を考慮する必要がある、現時点で確実なのは、ザリクムはスサの支配者であり、アッシュルでは将軍を名乗ったこと、この 2 点とすべきであろう。 ↗

ねることは一見奇異に感じられる。しかし、アッシュルとスサは遠く離れても、ウル第三王朝成立直前、プズルインシュシナクによるイラン高原の統一によって、エラム（NIM）が指し示す地域は小ザブ川上流まで拡大していた [前田 1993]。つまり、スサの支配者が管轄するエラム地方はアッシュル近くまで延びていたのであり、スサとアッシュルを結ぶ要路の大半はエラム地方に属する（図2）。当時の地理観からは、スサの支配者がアッシュルの將軍を兼務することに何ら問題はない。

ザリクムの在任期間、ウルの王は積極的にティグリス川東岸地域に遠征軍を送った。年名から知られる遠征先は、シャシュル（シュルギ42年）、シムルム（44年）、ウルビルム（45年とアマルシン2年）、キマシュ（46年）、ハルシ（48年）であり、年名に採られなかったが、アマルシン4年のシャシュル遠征も行政経済文書から確認される。遠征対象になったの

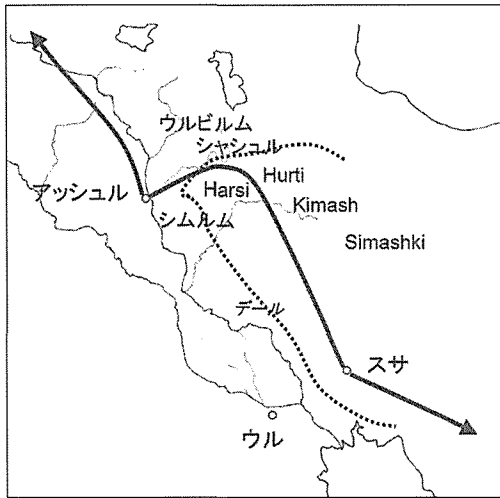


図2

はディヤラ川やザブ川を中心とした地域であり、これらの遠征において、ザリクムが重要な役割を果たしたと見て間違いない。この地域との関わりでは、スサ出土文書に、王の使節がディヤラ川流域にあったと推定されるジダヌムの支配者のために、ザリクムから家畜を受領する記録がある<sup>6)</sup>。

ザリクムがスサの行政にどのように関与したかは不明であるが、スサ出土の契約文書の末尾に「そのとき、ザリクムが支配者（エンシ）」と書き込む例がある [MDP 18 219]。シュメール都市ウンマ

↓  
Susa (\*=*ensi*<sub>2</sub>): TIM 6, 6 (S 40 xi)\*, AUCT 1, 954 (S 41 vii), PDT 2, 1266 (AS 3 xii 19), PDT 1 557 (AS 4), Scheil RT 37, 134 (AS 4 vi)\*, TCNY 366 (AS 5 Um)\*, RTC 326 (La ii)\*, Amherst 60 (La v)\*, RTC 325 (La xi)\*, ITT 4, 7812 (La [ ])\*, MDP 18, 219 \*

Asshur (*lu*<sub>2</sub>~): MVN 13, 706 (S 44 ix 29), CST 193 (S 47 x 25), YBC 7278 ([S 47?]): *ensi*<sub>2</sub> a-*šir*<sub>3</sub><sup>ki</sup> UCP 9/2, 36 (AS 5 xii 18), Amorites, 18 (AS 5 xii 22). za-ri-qum *šagina* <sup>4</sup>aš-*šir*<sup>ki</sup> RIME 3/2, 278

6) MDP 10 73 125 (AS 5): (*i*<sub>3</sub>) mu ra-si-*še*<sub>3</sub>, ki za-ri<sub>2</sub>-ik-ta, a-da-lal<sub>3</sub> lu<sub>2</sub>-kin-gi<sub>4</sub>-a lugal, *šu* ba-an-ti *ša*<sub>3</sub> a-bu-la-ad<sup>ki</sup>, in ze<sub>2</sub>-ti-an<sup>ki</sup> 「(油) ラシのために、ザリクムから、王の使節アダルが受領した。ジダヌム市のアブラトにおいて。」 *zi-da-num*<sub>2</sub><sup>ki</sup> の人 (支配者) ラシについては、ドレヘム文書において、アマルシン1年 (Delaporte, RA 8 : SA 72) からアマルシン4年 (SETDA 154) まで確認できる。アマルシン8年のドレヘム文書 MVN 1 113 では、ラシの子ヘティ (*he*<sub>2</sub>-ti dumu ra-*ši*) とあり、この時点で、ジダヌムの支配者はヘティに交代していたと考えられる。

の契約文書に、「そのとき、アフアがウンマの支配者」や「そのとき、ウルリシがウンマの支配者」[Steinkeller 1989]のように、スサ文書と同様の書き込みがある。契約文書の写しは、訴訟問題に発展したときのために公的な場所に保管されており、末尾に都市支配者の名を記すのは、都市行政を総覧する都市支配者がその責任を持つことを意味するのかもしれない。

ザリクムを継いでスサの支配者となったのが、ベリアリク be-li<sub>2</sub>-a-ri<sub>2</sub>-ik である。ベリアリクが、スサの支配者と同時に、(王の)酒杯人を名乗っていたことは注目される<sup>7)</sup>。酒杯人ベリアリクは、スサのエンシになる前、プズリシュダガンに置かれた貢納家畜管理施設で活動していた<sup>8)</sup>。シュルギ46年からは、管理者でなく、家畜を奉納する者として記録されるようになる [TCNSD 15]。ベリアリクはシュルギ46年から活動場所をスサに変更したのであろう。アマルシン5年には、スサの支配者ザリクムと並んでベリアリクの家畜奉納があり<sup>9)</sup>、アマルシン6年には、スサにある羊小屋に入れるための3600頭の穀肥羊を受領しており<sup>10)</sup>、ベリアリクの活動場所がスサであったことが確実になる。ベリアリクがザリクムの後任としてスサの支配者になったのは、明白にそれを示す史料はないが、アマルシン6年と考えられる。彼の在位期は、シュシン9年、もしくはイッピシン1年まで続く<sup>11)</sup>。

ベリアリクがスサのエンシとなって早々にシャシュル(アマルシン6年)やフフヌリ(同7年)への軍事遠征があった。ベリアリクは、前任者ウルキウムやザリクムと違って、將軍(シャギナ)でなく文官的な酒杯人からの転身であり、軍を指揮することなく、軍事行動の実動部隊はエラム在地の有力者が指揮したと考えられる。例えば、フフヌリ遠征の次の年アマルシン8年の文書に、捕虜となった5人のエラム人を連行してくる者として、エラム地方にあったドゥドゥリ市の支配者フリバルの部下の名を記すので<sup>12)</sup>、実動部隊の指揮官として

7) 「シュシン、彼の主人、ウルの王、四方世界の王、ベリアリク、酒杯人 (sagi), スサの支配者、シュシンダン、彼 (ベリアリク) の子<sup>d</sup>š<sup>u</sup>-<sup>d</sup>suen/ lugal-a-ni/ lugal-uri<sup>ki</sup>-ma/ lugal an-ub-da-limmu<sub>2</sub>-ba// be-li<sub>2</sub>-a-ri-ik/ sagi/ ensi<sub>2</sub>/ šušin<sup>ki</sup>/ <sup>d</sup>š<sup>u</sup>-<sup>d</sup>suen-kal dumu-ni/」 [de Graef 2005, pl. 15, no. 30]

8) TCNY 278 [S 42] に捺された円筒印章の銘文には「シュルギ、強き者、ウルの王、四方世界の王、ベリアリク、酒杯人 (は)、あなたの奴僕」とある。

9) CTOI 2 83 (AS 5 iii 26): 2 udu-niga 1 sila<sub>4</sub>, be-li<sub>2</sub>-a-ri-ik; 2 udu-niga, 2 udu a-lum-niga, 1 sila<sub>4</sub>, za-ri<sub>2</sub>-iq

10) Nik 2 479 (AS 6 iii 9): 3600 udu e<sub>2</sub>-udu-niga ša<sub>3</sub> šusin<sup>ki</sup>, be-li<sub>2</sub>-a-ri-ik i<sub>3</sub>-dab<sub>5</sub>, gir<sub>3</sub> ur-<sup>d</sup>nidaba

4月にも頭数が異なるが同様の記録がある。TAD 16 (AS 6 iv): 150 udu e<sub>2</sub>-udu-niga-še<sub>3</sub>, <šusin<sup>ki</sup>>, PN i<sub>3</sub>-dab<sub>5</sub>, gir<sub>3</sub> ur-<sup>d</sup>nidaba

11) SETDA 189: 40 gu<sub>4</sub>-niga, 300 udu-niga 4-kam-us<sub>2</sub>, 628 udu-niga gu<sub>4</sub>-e-us<sub>2</sub>-sa, 41 maš<sub>2</sub>-gal-niga gu<sub>4</sub>-e-us<sub>2</sub>-sa, 1 sila<sub>4</sub>, (970), be-li<sub>2</sub>-a-ri<sub>2</sub>-ik ensi<sub>2</sub> šusin<sup>ki</sup> (mu-tum<sub>2</sub>). 年名は破損して不明であるが、持参者の名からシュシン9年かイッピシン1年の文書と推定される。

12) RTC 380 (AS 8 xii): 5 NIM dab<sub>5</sub>-ba-me, ba-a lu<sub>2</sub>-<sup>gis</sup>tukul, e-gu-ša lu<sub>2</sub> hu-li<sub>2</sub>-bar, NIM dab<sub>5</sub>-ba-da mu-da-gin-na-me

在地の有力者フリバルを挙げることができる。

### III スッカルマフとエラム諸都市

ウル第三王朝は、軍事要員としてエラム人を活用したが、その表記は「アンシャンのエラム（兵）NIM an-ša-an<sup>ki</sup>」のように、地名で表記するのが通例である。例外として、支配者名を付す場合があり、それが、ドゥドゥリ市のフリバルである。「ドゥドゥリのエラム（兵）NIM du<sub>8</sub>-du<sub>8</sub>-li<sup>ki</sup>」と書くことよりも、「フリバルのエラム（兵）NIM hu-li<sub>2</sub>-bar」の方が多い。僅少なからアダムドゥン市のウバア [TCTI 2, 2690] とサブム市のアブムイリ [DAS 184, Berens 83] にも例がある。彼らは、在地支配者層として名を馳せていたのである。とりわけ、フリバルは王女を妻とし (dumu lugal dam hu-li<sub>2</sub>-bar: MVN 13 735)、ウルの王から期待されていたと考えられる。ドレヘム文書によれば、ドゥドゥリのフリバルは、アマルシン6年からシュシン3年にかけて幾度となく王からの下賜である家畜を受領する<sup>13)</sup>。この時期が彼の絶頂期であろう。

ラガシュのメッセンジャーテキストに記録される軍事要員たるエラム（兵）について、言及されることの多い上位5位を並べると次のようになる（文書の表示は省略）。

1) Shimashki 104, 2) Anshan 72, 3) Duduli 70, 4) Sabum 51, 5) Kimash 47

3番目にあるドゥドゥリの70には、NIM hu-li<sub>2</sub>-barが含まれる。最も頻度が高いシマシュキと2位のアンシャンについては、後で触れることになる。有力な在地支配者がいるドゥドゥリとサブムが3位と4位に挙げるのは順当であるが、有力者の一人であるウバアのアダムドゥン市は4回と少なく、10位内にも入らない。アダムドゥンは、先に見たように王の伝令が訪れることではスサに次ぐ有力都市である。アダムドゥンは王への奉仕として、グナ貢納を納め、ブズリシュダガンへの家畜持参も積極的であった。しかし、シュルギ治世にアンシャン遠征に参加したウルギギルと違って、ウバアは、ウルの軍事的要請には距離を保って積極的に応えなかったのかもしれない。

4位に挙げるサブムの支配者は、アマルシン治世以降、アブムイリ a-bu-um-AN である<sup>14)</sup>。彼は、ある時期から、ドゥドゥリのフリバル以上に、ウルにとって重要な協力者であった。

13) TCNSD 251 (AS 6 ix 16), MVN 5 95 (AS 7 i 9), Delaporte, RA 8, 13 (AS 8 iv [+]  
9), PDT 2 1147 (AS 8 x 13), TCL 2 5500 (AS 8 x 13), PDT 2 1269 (AS 9 xi),  
YOS 4 71 (SS 2 ii [ ]), TRU 335 (SS 2 v 12), CST 415 (SS 3 i 19), PDT 1 487 (SS  
3 i 25), SETDA 173 (SS 3 ii 1), PDT 2 1152 (SS 3 v 17), BIN 3 561 (SS 3 vi 12),  
BIN 3 562 (SS 3 vi 27), TRU 351 (SS 3 vii 25), CST 423 (SS 3 viii 18). フリバルの使  
節 (lu<sub>2</sub>-kin-gi-a) は、TCNSD 411 (AS 5 ii), PDT 1 548 (AS 8 vii 2) に記録がある。

14) サブム市のアブムイリの初出は、現在のところアマルシン7年である (MVN 15 191 [AS 7  
Um iii])。

「フフヌリのエラムが、サブムの支配者アブムイリの手紙 (=命令書) によって、フフヌリから来た」とあるように<sup>15)</sup>、エラム地方の都市支配者に兵の動員を命じることができた。

ただし、ラガシュのメッセンジャーテキストにおいて、最も多く手紙 (命令書) を発するのは、アブムイリでなく、スッカルマフ職のイルナンナである。メッセンジャーテキストに記録されたスッカルマフの手紙のほとんどがドゥドゥリとサブムのエラム (兵) に対する命令である<sup>16)</sup>。ドゥドゥリの支配者フリバルの妻は王女であるが、スッカルマフの命令書に従って、サブムに行かされた例もある [NISABA 13 89]。このように、スッカルマフ職のイルナンナは、エラム地方の有力者層に命令できる地位にあった。それに反比例して、スサのエンシ職にあったベリアリクの影響力は小さかったはずである。ベリアリクが在位するアマルシン治世後半以降、軍事を含めたエラム諸都市との諸事項はスッカルマフが一手に掌握したと考えられる。

イルナンナがスッカルマフ職とともに、ラガシュの支配者 (エンシ) 職を兼務したのは、ベリアリクがスサのエンシ職に就くのと前後するアマルシン7年である。イルナンナがラガシュの支配者に補任されたのは、シュメールの有力都市のなかで、最後まで抵抗してウルの支配下に入らなかったラガシュの処遇が問題になってのことであるが、ラガシュがエラムとの最前線に位置することから、対エラム政策も念頭に入れた処置であろう。ラガシュの行政経済文書によれば、イルナンナは、「スッカルマフ、ラガシュのエンシ」を名乗り、ラガシュ国内の統治には無関係なスッカルマフ職を称号から外すことなく明示するのも、対エラム政策に積極的に取り組む姿勢を示すためと考えられる。

イルナンナは、シュシン1年に、「下の海から上の海の征服者」と命名されたシュシンの像を保持していた<sup>17)</sup>。そのことで、即位したシュシンの軍事的強政策を支持し、積極的にそれを担う意志を示した。

イルナンナは、ウルの王シュシンのためにラガシュに神殿を建てたことを記念して作った

15) McNeil, Messenger 540: NIM hu-hu-nu-ri<sup>ki</sup>-me, hu-hu-nu-ri<sup>ki</sup>-ta gin-ne-ne, u<sub>3</sub>-na-a-du<sub>11</sub> a-bu-um-AN ensi<sub>2</sub> sa-bu-um<sup>ki</sup> <-ta>, gir<sub>3</sub> AN-ba-ni lu<sub>2</sub>-<sup>gi</sup>tukul

16) フリバルへの命令書: Jean RA 19, 39; Jean RA 19, 41; RTC 382; TCTI 2, 3242; TCTI 2, 3402; DAS 75; DAS 82; TEL 54.

サブムのエラムへの命令書: TCTI 1, 668; TCTI 2, 3203; Delaporte ZA 18, 7; MVN 2, 223; DAS 79.

17) Sollberger, AnSt 33 (1986) 74: MAH 16612 (SS 1 Dr vi): 「3 マナのラピスラズリ、下の海から上の海の征服者である王の像のために、スッカルマフに代わって、ル某から、アムが受け取った 3 ma-na<sup>na</sup> za-gin<sub>3</sub>, mu<sup>uru</sup>du alan-lu[gal] a-ab-ba-sig-ta a-a[b]-ba-igi-nim-da gu<sub>2</sub> [-gar-še<sub>3</sub>], mu sukka<sup>l</sup>-mah-še<sub>3</sub>, ki lu<sub>2</sub>-<sup>d</sup>[ ] x [ ] (Sollberger: ki lu<sub>2</sub>-dingir-ra dub-sar-ta), a-a-mu [šabra], šu ba-an-[ti], itu a<sub>2</sub>-ki-[ti], mu<sup>d</sup>šu-<sup>d</sup>suen lugal]

同年の別の文書 (SETUA 172) に「スッカルマフの家にあるシュシンの像」とあることから、この像がスッカルマフの所にあったことは確かである。

碑文に、自らを形容するために、主に東方地域の都市/国の将軍や支配者（エンシ）という多くの称号を並べた [RIME 3/2, 324]<sup>18)</sup>。そこには比定が困難な地名も含まれるが、エラム関係では、バシメ、サブム、シマシュキが挙げられ、スサは含まれない。王が派遣したベリアリクが在任していたからであろう。イルナンナが何時からこうした都市/国の支配者職や将軍を称し得たかをティグリス川東岸のハマジ、ウルビルム、ついでエラム地方のバシメ、サブム、シマシュキによって確認したい。

ティグリス川東岸では、イルナンナはウルビルムの将軍、ハマジの支配者を名乗る。ウルビルムは軍政地域の最北に位置し、アマルシン2年まで反乱を繰り返した。アマルシン治世に、王女と思われるミギルニルルトゥム (mi-gir-<sup>d</sup>nin-lil<sub>2</sub>-tum) がウルビルムの支配者ナニブアタルの子の妻 (e<sub>2</sub>-gi<sub>4</sub>-a) となっており [CT 32 26-29]、ウル王は降嫁政策によって宥和を図った。シュシン7年のウルビルムの軍団に課せられたグナマダ貢納に際して、イルム (ir<sub>11</sub>-mu) が軍団長として記録される [DC 1 6]。イルムはイルナンナの別名であり、シュシン7年にはウルビルムの将軍であったことが確認される。

イルナンナが支配者職に就くハマジは、小ザブ川上流部のザクロス山脈沿いにあったと考えられており、アマルシン初年 [MVN 3 217] から、ルナンナとその子ウルイシュクルがハマジの支配者（エンシ）であった。アマルシン治世に、「王がハマジの支配者ナムハニの子ルナンナの家で宴を催し」ており<sup>19)</sup>、友好関係が築かれていた。シュシン7年には、ウルビルムと同様に王女ダブルハットゥムが支配者の子の妻となっている<sup>20)</sup>。イルナンナとハマジの関係を示す同時代の文書はないが、少なくともシュシン7年まで、イルナンナがハマジの支配者職に就く余地はない。

エラム地方では、イルナンナが将軍となったバシメは、シュルギ治世にクルビラク kur-bi-la-ak が支配者であり [Dhorme, RA 9 : SA 25]、48年7月にも家畜を貢納した [Amorites 12]。1ヶ月を経ず、8月2日には、「バシメの人シュダバニの妻であり、王女のタラムシュルギの家へ」家畜が支出された<sup>21)</sup>。王女を妻としたバシメの支配者シュダバニは、確証はないがアマルシン治世まで在位したと考えられる。その後のシュシン6年の文書に、バシメの羊がスッカлмаフから (ki sukkal-mah-ta) 支出された記録があり [TLB 3, 34]、

18) 「イルナンナ、スッカлмаフ、ラガシュの支配者、エンキ神のサンガ、ウザルガルシャナの将軍、バシメの将軍、サブムとグテブムの国の支配者、ディマトエンリルの将軍、アル・シュシンの支配者、ウルビルムの将軍、ハマジとカルハルの支配者、ニヒの将軍、ルス（シマシュ）とカルダの国の将軍、彼（シュシン）の奴僕」

19) Sollberger JCS 10, 12: u<sub>4</sub> lugal-mu e<sub>2</sub> lu<sub>2</sub>-<sup>d</sup>nanna dumu nam-ha-ni ensi<sub>4</sub> ha-ma-ze<sub>2</sub><sup>ki</sup>-ka kaš i<sub>3</sub>-nag-ga<sub>2</sub>-a

20) PDT 1 454 (SS 7 xi 29): da-bur-hat-tum e<sub>2</sub>-gi<sub>4</sub>-a ur-<sup>d</sup>iškur, u<sub>4</sub> ha-ma-ze<sub>2</sub><sup>ki</sup>-še<sub>3</sub> i<sub>3</sub>-gin-na-a

21) Steinkeller 1983: 241, note 16, l. 14: e<sub>2</sub> ta<sub>2</sub>-ra-am-<sup>d</sup>šul-gi dumu-munus lugal dam šu-da-ba-ni lu<sub>2</sub> ba-šim-e<sup>ki</sup>-ka-še<sub>3</sub>.



この頃までにはイルナンナがバシメの將軍職に就いていた。

イルナンナがエンシ職に就いたサブムは、先述のごとく、アブムイリが有力な支配者として権勢を振るっていた。シュシン8年の文書 MVN 15 187 にサブムの支配者として記される a-hu-um-me-lum がアブムイリの誤記であれば、この時期まで在位したことになり、イルナンナの就任はそれ以後になる<sup>22)</sup>。

イルナンナが將軍を名乗るシマシュキについては、シュシン7年のザブシャリの反乱を、シュシン碑文が、「シマシュキ人が、ザブシャリの国の、アンシャンの境界から上の海まで、イナゴのように蜂起した」[RIME 3/2, 303] や、「ザブシャリの国とシマシュキの国々を征服したとき」[RIME 3/2, 313] と記すように、シマシュキの反乱でもあった。イルナンナがシマシュキの將軍を務めるのは、戦後処理のためであろう。

このように、イルナンナが各種の称号を名乗り得たのは、シュシン治世でも末期、8年か9年である。イルナンナは早い時期からスッカルフ職にあり、アマルシン7年にはラガシュの支配者職をも兼務し、東方政策推進の最重要人物であった。とりわけ、シュシン7年のザブシャリの反乱のあとでは、在地の有力支配者アブムイリがいたサブムを直接統治するなど積極的な介入によって、ウルビルムを北端とする軍政地域からエラムの広い領域に政治的軍事的影響力を行使する者となった。

#### IV シマシュキ朝の成立

スッカルフ職のイルナンナが主導するエラム統治体制は、ウルの王がシュシンから第五代で最後の王となるイッピシンに代わってまもなく崩壊した。エラム支配の要であったスサにおいて、イッピシンの年名は3年までであり<sup>23)</sup>、以後使用されない。代わって、年名「エバラトが王（になった）年」、「エバラトが王（になった）次の年」が現れる<sup>24)</sup>。エバラトが

22) 年代は特定できないが、サブムの支配者として<sup>d</sup>su-<sup>d</sup>suen-ba-ni が記録される (ITT 2 1030)。その名に王であるシュシンを含むので、シュシン治世かそれ以後に在位したことは確かであるが、イルナンナの前か後かは判断できない。

23) スサ出土文書に記載されるウルの年名

AS 4 : MDP 10 74 126, AS 5 : MDP 28 71 454, SS 2 : MDP 28 109 467, SS 4 : MDP 28 57 410, SS 5 : MDP 54 2 54 3, SS 8 : MDP 54 7, IS 1 : MDP 54 10, IS 2 : MDP 10 71 121, IS 3 : MDP 18 79

24) エバラトの年名

mu e-bar?-at? lugal : MDP 18 199

mu <sup>d</sup>i<sub>3</sub>-a-ba-ra-at lugal mu-us<sub>2</sub>-sa-bi : MDP 23 162 292

mu-us<sub>2</sub>-sa ia<sub>3</sub>-ab-ra-at lugal : MDP 23 162 291

mu-us<sub>2</sub>-sa e-ba-ra-at lugal : MDP 23 163 296

mu-us<sub>2</sub>-sa i<sub>3</sub>-a-ba-ra-at lugal : MDP 23 163 295; 163 297; 163 298; 163 299; 164 300; 164 301; 164 302; 164 304

スサにおいて王として即位しており、しかも独立王朝の指標となる年名を採用した。エバラトの奴僕と称する臣下の円筒印章もスサから出土している<sup>25)</sup>。ラガシュなどのシュメールの諸都市がイッピシン治世早々にウルの支配から離脱したのと同様に、スサもウルの支配から離れた。スサの王エバラトとは、『エラムの王名表』に記されたシマシュキ王朝の12人の王のなかで、第3代の王として挙る e-ba-ar-ti と同一人物であろう。

『エラムの王名表』シマシュキ王朝 [Scheil 1931]

1) gi-ir-na-am-me, 2) ta-zi-it-ta, 3) e-ba-ar-ti, 4) ta-zi-it-ta, 5) lu-[r]a-ak-lu-uh-ha-an, 6) ki-in-da-at-tu, 7) i-da-ad-du, 8) dan-lu-hu-ra-te-er, 9) e-ba-ar-ti/ i-da-[ ], 10) i-da-ad-du, 11) i-da-at-tu na-pi-ir, 12) i-da-at-tu te-im-ti, 12 LUGAL<sup>mes</sup> ša ši-ma-aš-šu-ú

『エラムの王名表』にあるシマシュキ王朝第6代の王キングトウが、王都ウルに侵入し、ウル第三王朝を滅ぼしたエラムの王である<sup>26)</sup>。シマシュキを母体としてウルを滅亡させるほどの勢力に成長する王朝が、すでにイッピシン治世の初頭に姿を見せた。王朝成立に至るシマシュキの動向をシュルギ治世から順次見て行きたい<sup>27)</sup>。

シュルギ治世、シマシュキは、異民族マルトウ (kur mar-tu) と同様に支配に服さない異民族として討伐の対象になっており、シマシュキの戦利品の記録は、シュルギ46年、47年、48年にある<sup>28)</sup>。48年のシマシュキの戦利品に関しては、ディヤラ川流域に位置するエシュヌンナの支配者が輸送責任者である。スサやアンシャンに拡大したシマシュキでなく、北に位置するシマシュキの本貫地が討伐の対象であったと考えられる。

アマルシン治世になると、シマシュキから来た使節への下賜の記録が増える。さらに、ウルの王に奉仕するシマシュキのエラム(兵)は、先に引いたように、アンシャンなどを凌駕した最多の頻度で現れる。これはアマルシン以降にウルに友好的な動きを活発化させたことを意味する。

25) MDP 10 22 4 : šu-<sup>d</sup>ba-u<sub>2</sub>/ dumu tal-lik ar?-te?/ ir<sub>11</sub> e-ba-ra-at/

26) ウルを滅ぼしたエラムの王がキングトウであることは、ウルの解放を含めて対エラム戦争を主題にしたイシビエラの讃歌から明らかになる。「[下の] 海の岸であるバシメからザブシャリの端まで、エラムの門戸であるアラワからマルハシの端まで、エラムの人 (= 支配者) キングトウ (ki-in-da-tu) は [欠損]」 [van Dijk 1978: 189-208]

27) シマシュキについては、ストルパー [Stolper 1982] が資料を網羅して問題点を整理する。エバラトに焦点を当てたシュタインケラー論文 [Steinkeller 2007] とは相似した論点や方法を取るようになるが、本稿はキングトウが要点であり、結論は異なる。なお、lu<sub>2</sub> su/ su.a<sup>ki</sup> がシマシュキを指すことは、シュタインケラーが明らかにしている [Steinkeller 1988]。

28) TPTS 130 (S 46 v) : kuš-gu<sub>4</sub> nam-ra-ak da-ba-du lu<sub>2</sub>-SU, ki šu-<sup>d</sup>en-lil<sub>2</sub>-la<sub>2</sub> dumu-lugal-ta; MVN 13, 672 (S 47 i<sup>2</sup>) u<sub>4</sub> lu<sub>2</sub>-su-a<sup>ki</sup> mu-tag-tag-a im-PI-e-e<sub>2</sub>š; Michalowski JCS 31 p. 175: HSM 911.3.102 (Sg 47 ii) ša<sub>3</sub> nam-ra-ak lu<sub>2</sub>-su; Silejko, ZVO 25 p. 134 (Sg 47 ii) ša<sub>3</sub> nam-ra-ak lu<sub>2</sub>-su; PDT 2 802 (S 47 v) nam-ra-ak lu<sub>2</sub>-su.; CTOI 1 355 1 (S 48) : gu<sub>4</sub> ba-ug<sub>7</sub> : ša<sub>3</sub> nam-ra-ak lu<sub>2</sub>-su-ka, — gir<sub>3</sub> kal-la-mu ensi<sub>2</sub> aš<sub>2</sub>-nun<sup>ki</sup>

ところで、ウル第三王朝時代の行政経済文書には、シマシュキの人（支配者）とされる者、たとえばバルバナズなど、多数が記録される<sup>29)</sup>。記録される複数のシマシュキの支配者のなから、『エラムの王名表』に挙がる者を選び出せば次のようになる。

Kiriname（『エラムの王名表』では初代）

シュルギ46年、シマシュキとは書かれませんが、gu-ri-na-meが3人の奴隷を献納する<sup>30)</sup>。

シュシン2, 3, 5, 6年に、エバラトの使節に並んで、ki-ir-na-meの使節が記録される<sup>31)</sup>。エバラト、キリナメともにシマシュキの人と明記される。エバラトと並ぶことは、シマシュキには複数の支配者が存在した可能性があり、注目される。

Dazite（『エラムの王名表』では、第2代と第4代が同名のta-zi-it-taとある）

アマルシン8年の1文書とシュシン2年の2文書において、シマシュキのエバラトの使節とともに、アンジャンの人ダジテの使節が記録される<sup>32)</sup>。ダジテは常にアンジャンの人として記録される。

Ebarat（『エラムの王名表』では第3代）

エバラトはシュルギ44年 [CTOI 1, 171] からシュシン6年 [TCNMC 7] までドレヘム文書に記録がある<sup>33)</sup>。多くはシマシュキの人と明記される。既に述べたように、イッピシン3年以降にスサの支配者となったことがスサ出土の文書から確認できる。

『エラムの王名表』に挙るシマシュキ王朝の初期の王と同名の者を、同時代史料である行政経済文書から拾った<sup>34)</sup>。その中で、第3代とされるエバラトがシマシュキの代表的な支配

29) バルバナズを記録するシュルギ46年の文書CTOI 1, 171では、支出に際してのギルの役割をGU<sub>2</sub>URUxGUの牧夫シュアダドが果たしている。彼は、別の文書でシマシュキとアンジャンからのGU<sub>2</sub>URUxGU貢納に合わせて、GU<sub>2</sub>URUxGUを支出する者として記録される。バルバナズもGU<sub>2</sub>URUxGUを持参したのであろう。シュタインケラーはGU<sub>2</sub>URUxGUをふたこぶラクダと解釈する [Steinkeller 2007: 219, no. 16]。

30) MVN 12 125 (S 46 xi) PN 1-3 : sag-rig<sub>7</sub> gu-ri-na-me-me

31) Langdon, *Babyloniaca* 8, 30 (SS 2 xi 14): šu-tu-un-gu lu<sub>2</sub>-kin-gi<sub>4</sub>-a ki-ir-na-mi lu<sub>2</sub> su<sup>ki</sup>; NSTROM 1 149 (SS 3 iv 12): šu-tu-un-gu lu<sub>2</sub>-kin-gi<sub>4</sub>-a ki-ir-na-mi lu<sub>2</sub> su<sup>ki</sup>; TPTS 2 2 (SS 5 [ ]) vi 8-10: lu<sub>2</sub>-kin-gi<sub>4</sub>-a, i<sub>3</sub>-ab-ra-at<sup>ki</sup>, lu<sub>2</sub> ki-maš<sup>ki</sup>-meと翻字されているが、lu<sub>2</sub>-kin-gi<sub>4</sub>-a, i<sub>3</sub>-ab-ra-at <ki?>, lu<sub>2</sub> <-kin-gi<sub>4</sub>-a> ki-ir-na-meと読む箇所と思われる; TCNMC 7 (SS 6 ii) i<sub>3</sub>-a-da-az lu<sub>2</sub>-kin-gi<sub>4</sub>-a ki-ir-na-me; zu-ur-zu-ra lu<sub>2</sub>-kin-gi<sub>4</sub>-a i<sub>3</sub>-ab-ra-at, lu<sub>2</sub> su<sup>ki</sup>-me-eš<sub>2</sub>

32) AS 8 : BIN 3 477: kir-ri lu<sub>2</sub>-kin-gi<sub>4</sub>-a da-a-zi lu<sub>2</sub> an-ša-an<sup>ki</sup>

SS 2 : Langdon, *Babyloniaca* 8 30: ši-la-ti-ir lu<sub>2</sub>-kin-gi<sub>4</sub>-a da-a-gi-te lu<sub>2</sub> an-ša-an<sup>ki</sup>

SS 2 : Owen Fs Astour, Nesbit D: ši-la-ti-ir lu<sub>2</sub>-kin-gi<sub>4</sub>-a da-a-zi-te lu<sub>2</sub> an-ša-an<sup>ki</sup>

33) シュタインケラーは、シュシン8年までとする [Steinkeller 2007: 218]。しかし、8年の文書には、エバラト市のエラム（兵）(NIM i<sub>3</sub>-ab-ra-at<sup>ki</sup>-me [TEL 46])とあり、支配者エバラトの史料として数えることはできない。

34) 第1代とされるキリナメがシュシン6年まで文書で確認されるように、第2代ダジテや第3代

者であり、シュシン6年までウルの王に使節を派遣していた。

シュシン7年に、ウルの王シュシンはザブシャリとシマシュキから戦利品として奪った金で像を造った [RIME 3/2, 305]。征服の対象になったシマシュキの指導者はエバラトであろう。このちイッピシン治世になって、再起したエバラトは、スサの王となり、シマシュキの勢力を拡大した。一方、『エラムの王名表』に初代として挙るキリナメは、シュシン治世までシマシュキ本貫地の支配者の一人として活躍したのであろう。

シュシン7年のザブシャリとシマシュキの反乱に、主要都市アンシャンは組していない。ザブシャリとシマシュキからは戦利品が運ばれたが、アンシャンについては、「ザブシャリの国とシマシュキの国々を征服し（たとき）、グナ貢納としてアンシャンが持参した大山羊の、その似姿の像を造つ」たように [RIME 3/2, 313]、恭順・服従の証としてのグナ貢納をウルの王に捧げた。アンシャンは、ウルの王に敵対したシマシュキと異なり、討伐の対象になっていない。最初から反乱軍に加わらなかったか、もしくは早期に反乱側から離れて、ウルに恭順したのである [前田 1990]。

この時期のアンシャンはシマシュキ出自のダジテの支配下にあったと考えられるが、彼はシマシュキの人エバラトと共同歩調を取らなかった。スッカルマフ職のイルナンナが、シマシュキの將軍を名乗っても、アンシャンに関わる称号を名乗らないのは、友好的なダジテの地位がそのまま認められたからであろう。

過去にさかのぼってアンシャンの動向をまとめると、シュルギ治世、ウルの王女の降嫁と反乱の後、シュルギ30年代にシェリブムという支配者がいた<sup>35)</sup>。在地の支配者と考えられる。その後の44年にアンシャンの人とされる hu-un-da-hi-še-er の使節が [CTOI 1, 171]、アマルシン2年頃にはアンシャンの人 bi<sub>2</sub>-in-zi の使節が、ともにシマシュキの人エバラトの使節と家畜を持参した<sup>36)</sup>。シュルギ治世の末までに、北に位置するシマシュキは、スサでなく、南に離れたアンシャンにまず勢力を伸ばしていた。ただし、『エラムの王名表』がダジテを王として挙げるように、シマシュキ出自でアンシャンに独自の権力を築いたのは、アマルシン8年からアンシャンの人（支配者）として確認されるダジテであろう。

シマシュキ出自のエバラトがスサの支配者になったであろうイッピシン4年時点で、エラムの2大都市アンシャンとスサはともにシマシュキ出自の王に支配された。ただし、スサとアンシャンでは対ウル政策は一致しておらず、同じシマシュキ出自であるにしても王統は別

↙ エバラトと同時代を生きている。『エラムの王名表』に並ぶ王は、系譜も治世年数も記載されない。登位順序も、事実でなく、後の時代に何らかの意図を持って編成されたと考えられる。

35) RTC 328 (La xi+i): (še)-li-bu-um ensi<sub>2</sub> an-ša-an<sup>ki</sup>. この文書には、シュタインケラーが指摘するように [Steinkeller 2007] アダムドゥンの支配者として ur-<sup>gis</sup>gigir が記録されるので、シュルギ30年頃の作成と考えられる。

36) A 5477: Steinkeller 2007: 224, no. 40. シュタインケラーはこの文書をアマルシン2年と推定する。

表 1

	イッピシンの年名	
3年	シムルムを征服した年	
5年	王女をザブシャリの支配者と結婚させた年	
6年	ニップルとウルに大城壁を造った年	
9年	アンシャンの門戸であるフフヌリに進軍した年	
13年		イシンのイシビエッラ独立
14年	スサとアダムドゥン、それにアワンの国に嵐のごとく吼えたり、一日にして打ち砕き、その王(エン)を捕虜とした年	ニップルの喪失
17年	マルトゥが服従した年	
23年	異国に群がる猿が攻撃してきた年	
24年		ウル第三王朝滅亡

であったと考えられる。

イッピシン治世のエラムに関連した事項は上表のようになる。イッピシン5年のザブシャリへの降嫁は、ウルの支配から離脱したエバラトのスサを牽制するためと説明できるが、イッピシンのエラム遠征には奇妙なことがある。ウルから見て近くのスサへの遠征が14年であり、それ以前の9年に、スサより遠方の「アンシャンの門戸」であるフフヌリへの遠征がある。スサはイッピシン3年以降ウルの支配から離れており、もし、スサが明確な敵として対峙したならば、フフヌリ、アンシャンへの遠征は不可能であったはずである。ウルとスサの関係、さらに、エラムの2大都市スサとアンシャンとの関係を整理する必要がある<sup>37)</sup>。

イッピシン9年に「アンシャンの門戸」であるフフヌリ遠征が実施されたとき、同じシマシュキ出自であるが、スサにエバラト、もしくはその後継者がいて<sup>38)</sup>、アンシャンには別系統の支配者が存在した。シュメールの地でイシンに独立王朝を樹立したイシビエッラが、ウルの征服を意図しなかったように、スサで王となったエバラトはウルとの戦争を望まなかったのであろう。それに対して、アンシャンに拠る別のシマシュキ王家は、ウルに対して強硬政策を取り、ウルの遠征を招いた。このウルへの敵対を意図したアンシャン王はダジテでなく、キンダトゥであったと考えられる。

ダジテはウルに対して友好的であった。彼がアンシャンの支配者になったアマルシン治世よりあと、シュシン5年にウルの王女がアンシャンに行く記録がある<sup>39)</sup>。メッセンジャーテ

37) シュタインケラーは、イッピシン9年時点で、エバラトのスサ支配は終わっており、ウルが再び勢力下に置いたと推定する [Steinkeller 2007: 223]。スサからこの時期のイッピシンの年名は見つかっていないように、ウルが勢力を盛り返したことを裏付ける証拠はない。

38) スサ出土文書に記された年名「フランテムティの像を造った年 mu<sup>urudu</sup>alan hu-ut-ra-an-te-im-ti ba-dim<sub>2</sub> (MDP 24 385) にあるフランテムティが、『エラムの王名表』に第5代の王として挙る lu[-r]a-ak-lu-uh-ha-an と同じ王であれば、フランテムティはスサの支配者としてエバラトを継承した可能性がある。

39) Virolleaud, ZA 19, 385 (SS [5] i): dumu-munus-lugal an-ša-an<sup>ki</sup>-še<sub>3</sub> gin-ne<sub>2</sub>, gir<sub>3</sub> da-a-a

キストにおいて、アンシャンのエラム（兵）の記録がシマシュキに次いで多いのは、ダジテがウルに協力的な姿勢を示したことの現れであろう。

一方のキングトゥはウルを滅亡に導く王であるが、その拠って立つ地はアンシャンであった。エラムがウル攻撃を開始する1年前のイシビエッラ14年（＝ウル王イッピシン21年）のイシン出土文書に、「アンシャンからの手紙」を入れた袋の記録がある [BIN 9 302]。『ウル滅亡哀歌』では、敗れたイッピシンはアンシャンに連れ去られた [Kramer 1940]。つまり、キングトゥ治世下のエラムの政治的中心はアンシャンにあったのであり、キングトゥがウルへの反抗を示した最初がイッピシン9年であったと考えられる。

その後のイッピシン14年に実施されたスサ遠征については、アンシャンを本拠とした王統であるキングトゥが、スサに拠る宥和派のエバラト、もしくはその後継者（フトランテムティ？）を廃して、イダドゥを送り込み、対ウルの強硬策を強めたことによるのだろう。つまり、キングトゥは、本拠とするアンシャンとともに、エラムの最高神インシュシナクを祭るスサをも領域に組み入れたのであり、全エラムを支配したことが、ウルが軍を差し向ける要因になったと考えられる。ウル第三王朝滅亡の2年後、イシビエッラ19年のイシン文書 [BIN 9 382] にキングトゥ ki-in-da-du とイダドゥ i-da-[du?] の使節への支給記録がある [前田 1992]。イダドゥは、キングトゥとともにメソポタミアの有力な王朝に成長したイシンのイシビエッラとの間で外交交渉を行ったように、キングトゥのために重要な役割を担っていた。

表2

	Susa	Simashki	Anshan
シュルギ	Urkiu Zariq	Girnamme	Dazite
アマルシン		Ebarat	
シュシン	Beliarik	Kindattu Idaddu	Kindattu
イッピシン	Ebarat		

エラムの二大都市であるアンシャンとスサをともに支配した王の出現はキングトゥを待たねばならない。この結論を補強するイダドゥの碑文がある [Steinkeller 2007: 221-222]。この碑文は、シュメール語で書かれた碑文としては定形から外れるところがあり、検討を要する。銘文は次のようになっている。

- (1) <sup>d</sup>i-da-du, dumu-dumu <sup>d</sup>e-ba-ra-at, dumu <sup>d</sup>ki-in-da-du
- (2) sipa <sup>d</sup>utu, ki-ag<sub>2</sub>-<sup>d</sup>inanna, lugal an-ša-an<sup>ki</sup>, lugal si-ma-aš-ki u<sub>3</sub> NIM-ma
- (3) ki-te-en-ra-ki-id-da-bi, sukkal-mah NIM-ma u<sub>3</sub> te-eb-bi-ir, arad<sub>2</sub>-da-a-ni, mu-na-dim<sub>2</sub>

↙ MI<sub>2</sub>.HU.BA dumu a-gu-da. 参考になるウンマ文書がある。UTI 3 2202 (SS 5): mu dumu-munus-lugal an-ša-an<sup>(ki)</sup>-še<sub>3</sub> gin-na-še<sub>3</sub>

シュメール語碑文では、王の名、称号、系譜の順で記されるのが通例であるが、この碑文では、系譜（1）が先にあり、称号（2）「ウトゥ神の牧夫、イナンナ神に愛される者、アンシャンの王、シマシュキとエラムの王」がその後で纏めて記される。ここにあるように、イダドゥは、アンシャンを王都にして、シマシュキとエラム両地方を支配する王を名乗っている。問題は、称号の前に書かれた系譜である。シュタインケラーは、「イダドゥ、エバラトの孫、キングダトゥの子」と解釈し、エバラトーキングダトゥーイダドゥ3代の系譜が証明されたと考える [Steinkeller 2007: 222]。しかし、そうは言い切れない。シュメール語碑文で3代の系譜を記そうとすれば、単純に、「N, N<sub>2</sub>の子である N<sub>1</sub>の子, N, dumu N<sub>1</sub>, dumu N<sub>2</sub>」という形式を取る。この碑文では、父、祖父の位置が逆転する。さらに、シュタインケラーが、「孫」と訳した *dumu-dumu* も、シュメール語碑文では見かけない用語である。確かに、アッカド語の「*mār mārī* 孫」に対応する形で、*dumu-dumu* と表記することはあるが、それは古バビロニア時代以降の表記法であって [CAD M/1, s. v *mār mārī*]、この碑文が書かれたウル第三王朝時代前後の時期では異例である。用語の問題を別にしても、この書記法ではエバラトがキングダトゥの父であると明示しない。あくまでも、イダドゥを介して関係が示されているだけである。

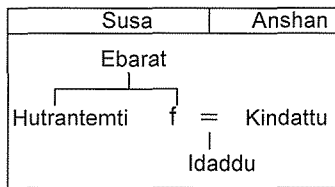


図3

このような特殊な書き方をした理由を考えると、参照されるのが、前12世紀のエラムの王シルハクインシュシナクがスサのインシュシナク神殿の建立に関わった初期の王達を顕彰する碑文である。シルハクインシュシナクは、イダドゥから初めており、その系譜を「イダドゥ、フトランティプティの妹の子 (*ru-hu-ša-ak*)」のように記す<sup>40)</sup>。イダドゥの母方の伯父とされるフトラ

ンテプティは、スサ出土文書に記された年名に現れるフトランテムティのことであろう。彼は、エバラトの後にスサの支配者になったと考えられる。

フトランテムティを置くことで、図3のような系譜が描ける (Cf. Glassner 1996: 28)。この系譜では、イダドゥはキングダトゥとエバラトの王女との間に生まれた子になる。キングダトゥはエバラトの義理の息子であり、直接的な血縁関係はない。このような系譜になっているので、イダドゥの碑文は特殊な書き方になったのである<sup>41)</sup>。重要なのは、キングダトゥとエバラトは、同じシマシュキの出自であるが、別の王家に属したことである。

40) <sup>l</sup>i-ta-[at-du ru]-hu-ša-ak <sup>l</sup>k[hu-ut-ra-an-t]e-ip-t[<sup>l</sup>i-ri <sup>l</sup>tan]-[<sup>l</sup>ru-hu-ra-ti-ir ša-ak <sup>l</sup>i-ta-at-du-ri] [König 1977, 110: 48 §2.] ru-hu-ša-ak については [Hinz & Koch 1987: 1045-1046], [Glassner 1994].

41) *dumu-dumu* は、「孫」ではなく、「相続権を有する親族」のような広い意味があると考えられる。

イダドゥが父キングドゥに先んじてエバラトとの系譜を記すことには意味があるはずである。王号の面から考えたい。エラムの王が名乗った称号に関して、アッカド王朝からの独立を果たしたエラム王は、「スサの支配者、エラムの将軍」を名乗った<sup>42)</sup>。最高神インシュシナクから地上の支配権を与えられた王は、スサの王を名乗り、支配領域はエラム全土の軍事権の掌握を意味する「将軍」で示したのである。イダドゥは、引用した碑文では「アンジャンの王」を名乗るが、「スサの支配者、エラムの将軍」を復活させた [Thureau-Dangin 1907, 180, 2]。その子タンルフラテルと、タンルフラテルの子で王位を継いだイダドゥ2世も「スサの支配者」を名乗り、称号としてアンジャンの王を採用しない。これに対して、キングドゥがアンジャンの王を名乗ったことは同時代史料から確認されるが<sup>43)</sup>、エバラトの娘を娶った彼がスサの王を名乗った事例はない。

イダドゥが、父であるキングドゥの前に、エバラトの「孫」を挙げるのは、統一王朝に相応しくスサを王都にするために、エバラトの子フトランティムティからスサの支配権を奪うことの正当な理由として、エバラトとの血縁的な関係を強調したいがためであろう。キングドゥは実力でエラム全土の支配を可能にしたが、その子イダドゥは統一王朝に相応しい体裁を整えるために、王都をアンジャンからスサに移し、伝統的な王権観にしたがった王号を名乗ることになる。

## おわりに

ウル第三王朝は、エラム全土を直轄地にすることなく、在地の有力者層を活用しつつ、最初はスサに派遣した将軍を中心に、ついで、スッカルマフによる軍事・政治両面の一元的掌握という形で統治した。在地勢力の活用の面では、シュメール・アッカド地方の伝統的な都市国家に対する政策と同じである [前田 2003]。ウル第三王朝最後の王イッピシン治世早々にスサを失うことで、エラムの統制は弛緩した。こうした状況のもと、アンジャンを本拠としたシマシュキ勢力が台頭する。

『エラムの王名表』ではギルナメを初代とするが、スサとアンジャンを核として全エラム

42) 「アズルインシュシナク、スサの支配者、エラムの将軍 (ENSI<sub>2</sub> šušin<sup>ki</sup>, ŠAGINA ma-ti NIM<sup>ki</sup>)」 [Gelb & Kienast 1990: 328]。「エビルムピがスサの支配者 (ensi<sub>2</sub> šu-šin<sup>ki</sup>) になった (年)」 [Hirsch, AfO 20, 32 n. 4]; 「エビルムピ、エラムの国の将軍 (ŠAGINA ma-ti NIM<sup>ki</sup>)」 [Gelb & Kienast 1990: 319]。「イリシュマニ、書記、エラムの国の将軍 (ŠAGINA ma-ti NIM<sup>ki</sup>)」 [Gelb & Kienast 1990: 320]; 「イリシュマニ、スサの支配者 ensi<sub>2</sub> šušin<sup>ki</sup>」 [RTC 122]。「ウシュムガル、スサの支配者、エラム国の将軍 ensi<sub>2</sub> šušin<sup>ki</sup>, šagina ma-da NIM<sup>ki</sup>」 [Gelb & Kienast 1990: 319]。

43) 「イマズ、アンジャンの王 (lugal an-ša-an<sup>ki</sup>) キングドゥの子」 [Potts 1999, 147: MDP 43 1679]



を支配するシマシュキ王朝の実質的な創始者はキンダドゥであり、その子イダドゥが王朝の体制と王権理念を整えた。イダドゥが伝統とみなしたのはアッカド王朝滅亡後のプズルインシュシナクによる全エラムの統一によって生み出された王権観である。その意味で、前3千年紀末が、エラム史のなかで一つの画期と言える。

\*本稿は、第53回シュメール研究会（2010.5.8. 京都大学）において、本稿と同じ題目で口頭発表した原稿を、発表時に受けた指摘から再考し、改稿したものである。

## 略号一覧

AS: Amar-Sin, IS: Ibbi-Sin S: Shulgi, SS: Shu-Sin

CAD: *The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*, Chicago, 1959 -

RIME: *The Royal Inscriptions of Mesopotamia. Early Periods*. Tronto, 1990 - 2008

※楔形文字資料の略号は、Sigrist & Gomi 1991, de Graef 2005, 「シュメールにおける統一王権と都市支配者」(平成15～17年度科学研究費補助金 [基盤研究C一般] 研究成果報告書 [研究代表者 前田徹] 2006.3を参照のこと。加えるに次の1点がある。

Owen, Fs Astour: D.I. Owen, Ur III Geographical and Prosopographical Notes. In G.D. Young, et al (eds), *Crossing Boundaries and Linking Horizons. Studies in Honor of Michael C. Astour on His 80th Birthday*, Bethesda, 1997, 375 - 398.

## 参考文献

de Graef, K. (2005) *Les Archives d'Igibuni*, (Mémoires de la Délégation Archéologique en Iran, 54), Paris.

Gelb, I. J., & B. Kienast (1990) *Die altakkadischen Königsinschriften des Dritten Jahrtausends v. Chr.* Stuttgart.

Glassner, J. J. (1994) *Ruhušak - mār ahātīm*: la transmission du pouvoir en Élam, *JA* 282, 219 - 236.

Glassner, J.-J. (1996) Les dynasties d'Awan et de Simaški, *Nouvelles Assyriologiques Brèves et Utilitaires* (NABU) 1996, 34), 25 - 29.

Hallo, W. W. (1956) Zariqum, *JNES* 15, 220 - 225.

Hinz, W. & H. Koch (1987) *Elamisches Wörterbuch*, Berlin.

König, F. W. (1977) *Die elamischen Königsinschriften*, (*Archiv für Orientforschung*, Beiheft 16).

Kramer, S. N. (1940) *Lamentation over the Destruction of Ur*, Chicago.

前田 徹 (1990) ウル第三王朝時代の gú-na ma-da 『オリエント』33/1, 80 - 95.

前田 徹 (1992) イシビエゥラによるイシン王朝創設 『オリエント』35/1, 166 - 175.

- 前田 徹 (1993) ウル第三王朝成立直前におけるエラムの政治的統合『オリエント』36/1, 127-139.
- 前田 徹 (2003) 『メソポタミアの王・神・世界観——シュメール人の王権観』山川出版社.
- 前田 徹 (2008) シュシンの登位事情『西洋史論叢』30, 1-12.
- Potts, D. T. (1999) *The Archaeology of Elam. Formation and Transformation of an Ancient Iranian State*, Cambridge UK.
- Scheil, V. (1931) Dynasties élamites d'Awan et de Simaš, *RA* 28, 1-8.
- Sigrist, M., & T. Gomi (1991) *The Comprehensive Catalogue of Published Ur III Tablets*, Bethesda.
- Steinkeller, P. (1983) The Question of Marhaši: A Contribution to the Historical Geography of Iran in the Third Millenium B. C., *ZA* 72/2, 237-265.
- Steinkeller, P. (1988) On the Identity of the Toponym LÚ.SU(.A), *JAOS* 108, 197-202.
- Steinkeller, P. (1989) *Sale Documents of the Ur-III-Period*, Stuttgart.
- Steinkeller, P. (2007) New Light on Šimaški and Its Rulers, *ZA* 97, 215-232.
- Stolper, M. W. (1982) On the Dynasty of Šimaški and the Early Sukkalmahs, *ZA* 72, 42-67
- Thureau-Dangin, F. (1907) *Die sumerischen und akkadischen Königsinschriften*, Leipzig.
- van Dijk, J. J. A. (1978) Išbi'erra, Kindattu, l'homme d'Elam, et la chute de la ville d'Ur, *JCS* 30, 189-208.

(早稲田大学文学部)